



ニュースレターの発刊に期待する



学長 飯田 嘉宏

FDに関するニュースレターを発刊することを伺い、大変嬉しく思っております。

最近出された教育再生会議の第二次報告においても、「今すぐ取り組むべき改革」の1番目に「大学教育の質の保証」

が挙げられています。そして、質を保証する教育が出来るかどうかが本学の将来を決めます。そこで全教員が『質の保証』とは何か、そのためのシステムは何か、何をすべきかとの問題意識を共有して教育に当ることが重要であり、この問題意識を喚起して実践に到らせるのが今必要なFD活動だと思います。この度の発刊によりFD活動が全教員の日常の関心事となり、質の保証に向かって全学的努力が生まれることを心から期待しています。

さて、『質の保証』といっても、いろいろな考え方があると思います。中にはTOEIC何点以上とするのがそれだと考える人もいます。しかし大学の特性やレベルによってそれぞれ異なるものでしょう。本学ではどうでしょうか。是非これを考えていただきたいと思います。ちなみに私が聞かれたら、読み書き算盤とコミュニケーション及び英会話をリテラシー能力として一定以上を保証し、同時に柔軟な考え方や広い視野を教育する。加えて、教員の研究を基盤とした教育で創造的実践的能力（YNUニュース217号の記事参照）の育成をし、3種ある人材レベルを入学時から1ランク上げることだ、と答えるでしょう。

ところでFDと言うと、教育方法の技術的な改善のことだと考えることが多いようです。確かにその

目次

1. ニュースレターの発刊に期待する
2. 部局におけるFD活動の紹介
 - 工学部FD活動報告
 - 留学生センターFD活動報告
 - 授業評価アンケートへの現状認識調査（経営学部）
3. 他大学の取組み事例
 - “2006年問題”に対応した大学教育を考える—新しい自然科学教育への取組みとその効果
4. FDセミナー参加報告
5. 予告「FD合宿研修会」
6. FD推進部より

側面はありますが、本当に肝心なことは、各教員の職業意識に基づく教育に対する熱意だと思います。10年ほど前のことですが、当時最もFDの研究が進んでいた京都大学の研究センターに伺ったことがあります。そのセンター長にFDで最も重要なことは何かと質問したら、ずばり『教員の人間性です』と答えられ、我が意を得た覚えがあり、現在もそう思っています。実際、学生一人ひとりのその後の社会生活での自己実現を支援する教育を行うことに教員の存在意義があるわけで、何コマか授業を担当することでは断じてありません。大学教育といえども、教育にはこうした人間的側面が重要なわけで、この意識があつて初めて、知力と労力を伴う対話型教育が可能になるでしょう。本学の多くの教員がこの意識を持って努力されていることに敬意を覚えています。



部局におけるFD活動の紹介

ここでは、本学の各部局のFD活動について紹介します。

工学部FD活動報告

工学研究院・仁志 和彦
同上・眞田 一志
環境情報研究院・佐土原 聡
同上・富井 尚史
同上・小川 輝繁

工学部物質工学科JABEE認定継続審査受審 (仁志和彦)

日本技術者教育認定機構 (JABEE : Japan Accreditation Board for Engineering Education) は1999年に設立され、技術系学協会と密接に連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行っている。JABEE認定プログラムの修了生は、国家資格である技術士の1次試験を免除される。また、アメリカの技術者資格PEを取得するには、ABET認定の技術者教育プログラム、もしくはそれと同等のプログラムを修了していることが条件になるが、ワシントン協定に加盟したJABEEが認定したプログラムは、このような同等性が国際的に担保されている。JABEEには現在16技術分野がありそれぞれプログラムの審査を行っている。また審査には国内の85の専門学協会も協力している。審査は、大きく別け、新規審査、中間審査、認定継続審査がある。審査はプログラムがJABEEの設定した認定基準を満たしているかを自己点検書、実地審査により判定する方法で行われる。物質工学科ではJABEEによる認定が開始された2001年度に、いち早く試行審査を受審し認定の取得に向けて準備を開始した。翌2002年に「化学および化学関連分野」の認定を受け、2004年に中間審査を終え、現在2007年度の認定継続審査に向けて準備を進めている。

ベストティーチャ賞受賞者の授業方法の紹介

平成18年度ベストティーチャ賞は、工学部から眞田一志教授、渡辺正義教授、佐土原聡教授、田才晃教授および富井尚志准教授の5名の教員が受賞さ

れた。今回のニュースレターには、眞田一志教授、佐土原聡教授および富井尚史准教授の3教員に授業方法を紹介して頂いた。

(眞田一志教授)

このたび平成18年度ベストティーチャ賞を受賞することになり、日頃からご指導、ご鞭撻いただいております諸先生方に御礼申し上げます。今回、講義方法の紹介をさせていただく機会を頂戴しました。

私の講義では必ず板書をします。横長の黒板を3つに分割して、左から順に、中央、右、また左へと、板書する場所を区切っています。学生から、見やすいとの評価を頂いています。また、講義ノートを用意します。これは自分が教卓の前でまごつかないために必要と思って準備したのですが、話の筋が明確になるようです。授業の最後に毎回演習を行います。20分ぐらいですが、意外と好評です。カリキュラムにおける当該科目の位置づけとシラバスに沿うよう、講義計画を作成します。カリキュラムのうえで連続性のある科目を担当させていただいているので、その相互関係も強調します。また、シラバスには、成績評価の方法を明記しています。

このように特段斬新な手法を駆使しているわけではなく、むしろ古典的ともいえる講義ですが、学生から見たときのわかりやすさ、講義への安心感、が評価されたのではないかと考えております。今後とも、今回の受賞を契機に、さらに講義の改善にむけて努めて参りたいと存じます。

(佐土原聡教授)

私は工学部建設学科建築学コース2年後期の講義



「都市と自然環境」を担当しています。建築物が集まって形成される都市について、自然環境からの安全と自然環境保全のための環境負荷低減について、考え方と具体的方法などを広く学んでもらう内容です。今回原稿を依頼され、何が書けるか非常に悩みましたが、改めて自分の講義を客観的に見てみました。

学生の声によれば私の講義はわかりやすいことが特徴のようです。そこで思い当たるのは、受け手である学生の目線に立って講義を行おうとしていることでした。専門を学び始めて間もない大学2年生が何に興味をもって講義に臨んでいるかを、自分の学生体験をふり返りながら考え、どのように取り上げれば講義内容に興味をもち、なじんでいくことができるかを工夫しています。具体的に一例をあげると、当然のことですができるだけ身近な建築や都市、日常生活の現場から説明を始めることです。また、学生が学んで自分のものにしていく過程で、私自身が疑問に思ったきっかけなどから、内容を理解し腑に落ちるまでのプロセスや感動も含めて伝えることが大事と思ひ、そのような講義を心がけています。

講義の内容にもよりますが、大学の講義の役割の一つとして、受講した学生にそのテーマに興味をもってもらい、テーマの入口を将来にわたって開けておいてもらうことが重要ではないかと思っています。社会に出て本格的にそれが必要になった時に役立つ、知識を吸収するための入口とそのうつつわ（知識を収める箱）を用意すること、そのために講義を

履修したあとにその全体像が簡潔にイメージでき、骨組みとなる体系が残っていきなじみやすい講義を工夫していきたいと思っています。

（富井尚志准教授）

異なるスタイルで行った二つの科目の実施方法について紹介したい。

まず情報処理Iでは、同科目を担当する森辰則先生とともに、前任者の授業資料を基にしてコースウェアを作成し、森先生の管理する授業用ホームページに掲載して使用した。授業形態は、講義室での座学1回と端末室での演習1回のペアを繰り返す。座学では、PCを用いて資料を投影して説明するとともに、演習で行う内容を実演した。演習は、電子情報工学科の3室の端末室に学生を割当て、各自、ホームページ記載のコースウェアに基づいて課題を実施させた。演習時間内に終了できなかった課題は宿題として後日の提出を認めた。

一方、計算機アーキテクチャでは、黒板をつかったオーソドックスなスタイルで実施した。授業全体で扱う話題の範囲が広いと、学生がポイントを絞って学習できるように、毎回の授業の終わり10分～15分程度を用いてその回の重要な内容に関する演習を行った。次回の授業開始時には、前回の演習問題の解答・解説を行うことで、その回の内容との関連や全体での位置づけについて意識させるよう配慮した。また、話題の一部について宿題を課して内容を補った。



留学生センターFD活動報告

留学生センター・奥野由紀子
長谷川健治
門倉 正美

新入留学生へのプレースメントテストと指導（奥野由紀子）

学部新入留学生の中には、まだ学部レベルの日本語力が十分とは言えない学生もいます。留学生センターではそのような学生のために、1年次の前期に

集中的に日本語の指導を行なっています。これに関わる2007年度の活動（予定を含む）を報告します。

- (1) 各学部の協力のもと、4月6日に学部新入留学生を対象とする統一プレースメント・テストを一斉に実施しました。新入留学生全員が受験



し、中級レベルに判定された学生に対し、個別に細かな履修指導を行ないました。

(2) 中級レベルと判定された学生にはこの1年次前期に技能別に分かれた日本語クラス「中級日本語」で集中的に指導を行ないました。

(3) 7月中旬に、「日本語中級」履修学生に対し、プレイスメントテストのリテストを行い今学期の日本語力の伸びを測定します。テストやクラスでの成績をもとに今後の勉強方法などについて指導を行ない、夏期休暇中の課題等を与える予定です。また夏期休暇中には日本語の夏期クラスを開講し、後期の日本語上級への橋渡しを行ないます。

(4) 3年間行なってきたプレイスメントテストの傾向を分析し、改訂を行なう予定です。技能別WGが立ち上げられました。

リテストの結果や各科目からの報告により、この1学期で中級者の日本語力は総合的に高まったことが明らかとなりました。しかしながら、学部の間割等の関係で現在開講されている「中級日本語」6科目のうち、その一部しか履修できていない学生がいるのも現実です。今後は、中級日本語クラスの開講時間帯についても検討していくつもりです。

JOY, JOY/Jプログラム研究発表会開催

(長谷川健治講師)

7月31日(火) 13:00~18:30, 教育文化ホール中集会室にて、JOY, JOY/Jプログラム研究発表会が予定されている。平成16年度春学期に「個別研究プロジェクト」をJOYプログラムの必須科目として以来、7回目の実施となる。当初「個別研究発表」であったが、今学期よりテーマ別にグループ編成を行い、グループごとの発表が行われる。

発表テーマは以下の通りである：

Youth Sub/Counter cultures, Environment, Business and Management, Atomic bomb, Gender and Sexuality, "Japanization", Media and Advertisement, Korea Japan Culture

第1回の研究発表会では21名の学生がJOYプログラムに在籍していたが、今回は49名が在籍しており、今学期から受入開始のJOY/Jプログラム(日本語上級者対象)も加わっている。本学の派遣留学生

等、学内外の関係者の出席が予定されている。拡大・多様化したプログラムに相応しい刺激的な発表会となることが期待される。

「地域課題プロジェクト」を担当して

(門倉正美教授)

今年度から地域交流科目の中の「地域課題プロジェクト」を、センター同僚の長谷川先生、工学研究院の秋元先生と3人で担当している。「留学生の地域交流と居場所(インターナショナル・サロン)づくり」を目指すもので、工学部3年生の長田さんをリーダーとして、日本人学生5名、留学生2名がプロジェクトに参加している。

筆者は、1995年以来、「異文化間コミュニケーション論」という教養教育科目で日本人学生と留学生との交流を心がけてきたが、和田町の地域住民と留学生との交流をプロジェクトメンバーが媒介するこのプロジェクトでは、日本人学生と留学生という学生同士の交流を土台として、留学生と地域住民との交流という新たな要素が加わることになる。

地域住民との交流という点では、筆者は1990年代に数年間、横浜市国際交流協会の主催する日本語教師養成講座での講師経験や、2000年代にやはり数年間、保土ヶ谷区のメディア・リテラシー公開講座での講師経験があり、その時の経験が生かせれば、と思っている。特に、和田町住民との交流という点では、以前から、和田町商店街と本学工学研究院の先生方が共同で取り組んでいる「和田町いきいきプロジェクト」に強い関心をもっていたので、今回、「いきいきプロジェクト」の秋元先生と一っしょに、このプロジェクトを担当することも、大学教員と地域住民との交流のあり方を考える上で大いに勉強になると考えている。

これからも留学生センターは、大学の国際化、そして留学生の横浜国大での勉学、大学生活が充実したものとなるように、様々な側面から取り組んでゆきます！！





授業評価アンケートへの現状認識調査

経営学部・中村 博之

1. はじめに

旧来の座学中心の講義形態の時代から、ディスカッションなど学生の講義への積極的参加、あるいはパワーポイント資料による説明が普及するなど講義形態は激変している。そのような状況でも、学生が社会で活躍する能力を身につけさせて社会に送り出すことは大学の使命であろう。ここで、消費者ニーズが変化するように、学生のニーズも変化している。このような状況で、教員は、学生に身につけさせたい能力を適切に伝えているのであろうか。授業評価アンケートは、このようなことを確認するための方法でもある。

現在、この授業評価アンケートについては、実施自体は定着しているが、これが十分機能しているかについては疑問視されることが多い。これは授業評価アンケートについて、アンケートを書く側とそれを受け取る側について認識が異なることも、その理由の1つであろう。実際、学生や教員からもそのような意見が散見されることがあった。そこで、経営学部FD推進部では、実施が定着した授業評価アンケートの実情について、学生からの聞き取り調査を行った。なお、今回は、全学生について行うことは不可能であり、かつ、学生の本音を聞くために本学部FD委員のゼミを中心に調査を行った。本稿では、このような学生の意見、さらには教員の意見も交え、今後の課題を再確認することとしたい。

2. 学生の視点

今回の聞き取り調査では、ゼミナール教員との懇談形式で行ったため、現状で学生が感じる、学生の視点での授業評価への意見、認識などをまとめることができた。すべてを網羅できないが、大半の意見は現状の実施方法には大きな疑問を持っていることが明らかとなった。ここでは、代表的な意見を示すと次の通りである。

「アンケート結果の用途がわからない。」

「皆、適当にマークしている。」

「出席がなく、単位の取りやすい授業が高評価となっている。」

「複数の先生が順番に講義を行う講義については、講義内容など現在のアンケート用紙では記入できない。」

「1年生のときはある程度真面目に書いたが、2年次以降に真面目に書いている人はいないのではないか。」

「ある程度単位が取りやすい先生、逆に厳しすぎて取りにくい先生は評価が高く、幅広く教えている先生は評価が低いのではないか。」

「この結果が先生の授業変更に活かされているとは思っていない。気にしている先生はいないのではないか。」

いくつか重複する意見もあるが、上記のアンケートへの意見には、授業評価アンケートを疑問視することの原因と結果を見ることができる。疑問視の原因としては、授業評価の趣旨が理解できないこと、記入が授業に反映されていると思わないこと、さらに記入様式も妥当でないことなどである。その結果、自身にとって都合の良い講義に高い評価をつける、あるいは、適当にマークするという事になっている。

ただし、否定的な意見ばかりでもなかった。たとえば、「学生の意見が反映されれば非常に良い仕組みだと思う。」という意見も実際に学生から聞くことができた。また、講義形態について、「パワーポイントは映すだけではなく、書き込みのため資料も欲しい。」など、講義を一過性のものにしないための建設的な要望もいくつかあった。アンケートで書かないような様々な意見を学生の視点、目線から確認することができたことは収穫であった。

3. 教員の視点

教員からも、公式、あるいは非公式に授業評価アンケートに関する話題が上ることは多い。本学部FD委員は、様々な形で意見を収集するように努めて



いる。否定的な意見としては、たとえば、「試験対策で、アンケート時のみ講義に来て、わかるはずのない講義について、否定的に評価する。」などというものである。実際、大人数講義で出席が取りにくい授業では、担当教員はそのような認識を抱きがちである。また、アンケートの記述欄において、「教員の容姿や性格などを誹謗中傷する学生がいる。」という意見があった。さらに、これに関連した一般論として、FD委員によれば、アンケート実施の先行している米国大学の教員との話しでも、アンケートがあるため、講義内容の質を落とさざるを得ないという意見を聞いたとのことである。

多数の教員はアンケート実施については合意しており、実際に定着したものとなっている。ただし、上記のような結果について、一部には、心を痛める教員もいるであろう。このような状況では、教員はアンケートする側への「節度」を求めたいという意識があるようである。

4. むすび

総論、すなわち全体的な仕組みとして、授業評価は学生と教員の相互にとって有用なものとなりうると思えることができる。ただし、これをどう活用す

るかは、学生にとって、さらには教員にとっても授業の質的な向上を図るため重要である。今回は、身近で日頃から接する学生から生の声を聞くことで、このことを痛感した。

現実には、いずれの評価にも常に困難がつきまとうが、その核心はお互いの不信感であろう。よって、基本的には、成績と同様に、アンケートでも評価する側とされる側の信頼関係の構築が根底には必要である。そのためには、評価する側に対しては、アンケート趣旨の合意に始まり、それによる改善効果について確認してもらうことが必要となるであろう。さらに、評価される側には、評価結果による改善が、大学教育の存亡、自己の研鑽のため必要であることを認識してもらい、改善のための適切な評価様式と実施方法を継続的に検討することが必要であろう。



他大学の取組み事例

“2006年問題”に対応した大学教育を考える

—新しい自然科学教育への取組みとその効果（細川敏幸・小野寺彰）

『化学』（化学同人）7月号，2007年，p. 15-18「時評」より

最近の「化学」という月刊誌に表題のような興味深い時評が掲載されました。本学でこの雑誌を購入されている方は少ないと思いますので、その内容をここにかいつまんでご紹介します。執筆された細川敏幸氏、小野寺彰氏は共に北海道大学の教授で、ここでは同大学の初年次の自然科学教育のカリキュラム改革の取組みとその効果について述べられています。

☆

“2006年問題”とは、いわゆる「ゆとり教育」とよばれる新学習指導要領で学んだ高校生が大学に入学しはじめた年が2006年であることから、そう呼ばれています。それ以前から、日本の科学リテラシーを支えてきた高校教育が大きく揺らぎはじめていました。高校の理科の科目では、「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から2科目の選択性となったため、入試で指定しない限り大学教育に要・不要のいかんに関わらず、選択しなかった科目は高校で学習しな



いまま大学に入学してくるようになりました。したがって、高校で履修しなかった科目の知識は中学の理科止まりであり、それを前提とした教育が大学に必要となっています。このような履修歴に加えて「ゆとり教育」による基礎学力の多様化を“2006年問題”と呼び、早くから多くの懸念が指摘されていました。そして、そのような学生が増大するにつれて、これはもはや学生個人それぞれの問題ではなく、大学の初年次教育のシステムとして考えなければならない課題になった、というのが北大での取組みの出発点です。

具体的に改革された内容は、①初年次の理系基礎教育を一新して、理系基礎科目にコース別履修制度を導入したカリキュラムを編成したこと、②自然科学実験を科目別に分けずに総合化したことです。①については、学力の多様化に対応した教育課程を編成し、カリキュラム、テキストの共通化を図り、ステップアップ授業方式が取り入れられています。取組みの詳細に関してはホームページに報告されていますのでそちらをご参照ください (<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/kyouikukatei.htm>)。具体的な授業の内容については、従来の板書を中心とした知識伝授型の講義スタイルからの脱却が提案されています。学生の集中力は通常15分が限界といわれていることから、適時に学生の注意を喚起する工夫が必要となります。授業の中にデモ実験を取り入れたり、動画やPowerPoint教材などビジュアル化された媒体で学生の理解を助ける工夫や、クイズ形式の演習を組み込み学生に能動的な参加を促す方法などが紹介されています。②については、これまでの学生実験の目的であった講義の補完や専門教育のための基礎的な実験スキルの修得という考え方を改め、総合自然科学実験として、狭い専門性に閉じこもりがちな学生・教員の意識を広く開放し、自然科学が本来持っている総合性・社会性・ダイナミズムを実感させようとする試みです。さらに、専門教育に先立つ導入教育として位置づけ、実験を通して講義への動機づけを行うこととして、講義で扱わないテーマや学際的なテーマも取り入れられています。

また、同様の取組みは、東北大学でも始められています〔読売新聞7月4日付朝刊「くらし・学び」欄〕。東北大では、3年前から理系学生を対象に、物理、化学、生物、地学に別れていた実験を統合した自然科学総合実験を始めていましたが、今年からは、文系学生を対象にした自然科学系の実験講義が

始められています。これまで講義中心だった授業を、実験・観察を通じて自然の仕組みを理解し、論理性を学ぶとともに、現代社会に利用されているさまざまな科学技術の知識を身につけることが狙いとなっています。

☆

さて、話は戻りますが、北大の取組みでさらに一点、筆者の興味を惹いたのは、大学院生のTAとしての有効的な活用法です。TAというと出席管理など教員のルーチンワーク的な作業軽減のための補助者という捉え方をしがちですが、それだけに留まらず、演習での質問対応、宿題の採点などにも活用しており、よくデザインされた授業では、TAの活用は教育の質を確実に向上させる効果があると述べられています。ただし、そのためには教員、TAの双方に入念な準備が必要です。特にティーチングのトレーニングを受けていない学生には、事前にTA研修を行なうことが必要になります。しかし、それではTAとなる大学院生には大きな負担となってしまいます。そこで、TAとしての指導を教員・研究者になるための教育キャリアパスとして認定し、単位化することにより、学生の側にもメリットとなるように制度化されました。TAは教員が楽をするためにあるのではなく、授業の質を向上させるためにあることを改めて認識させられる取組みです。

また、東京農工大における同様の取組みが読売新聞の教育ルネサンス欄〔7月11日付朝刊〕に紹介されています。ホームページからもご覧になれるので、ご参照ください (<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/renai/20070711lus41.htm>)。

☆

北大におけるこれらの取組みは、まだ課題はあるものの、学生のアンケート結果ではおおむね好評のようです。最後に、本時評は次のような文章で締めくくられています。“高校の教員と話していると、「先生、実は2008年の方がもっと問題なのですよ、2008年以降は小中学校から全て新学習指導要領のもとで育ってきていて、エイリアンのような感じですよ」と教えられた。理系基礎教育の改革は、多くの大学に共通の課題であり、ここで紹介したことが何かしらの参考になれば幸いです。”

理工系に限らず、人文・社会系の基礎教育においても、おおよその事情は同じでしょう。本学では、まだ、このような問題を声にする教員は少ないようですが、手遅れにならないうちに手を打つ必要があ

るのではないのでしょうか？

☆

以上のように、ゆとり教育世代に対する大学としてのカリキュラム改革を含めた取組みの事例を紹介してまいりましたが、教員個人として取り組むべきことも多々あるように思います。現在の大学2年生以下がゆとり教育を受けて入学してきた世代ということになりますが、本学の教員の皆さんはその変化を実感してらっしゃるのでしょうか？新課程では、その学習内容も、それ以前と比べて大幅に削減されています。従来通りの内容の授業をしていて、これまで高校で学習してきたはずだと思っていた用語について質問を受けたり、黒板に書いた公式や記号を初めて見たという指摘を受けて戸惑ったことはありませんか？あるいは、まだそのことが表面化していないだけかもしれません。普段の授業中における学生とのコミュニケーションや前期に実施した授業評価アンケートの結果などを通して、これまでの講義内容とゆとり世代の既習状況にギャップが生じていないかどうかを検証し、授業内容やスタイルを再考する必要性をご検討ください。

☆

この記事に関連した本学における問題点や改善策など、皆様方からのご意見がございましたら、FD推進部まで是非お寄せください。

(文責 杉村秀幸)

『わたしの工夫』欄 原稿募集中！

FDニュースレターでは、教員の皆さんからの授業におけるちょっとした工夫や学生の注意を惹き付けるコツなどを募集しています。掲載にあたっては記名／匿名のどちらでも結構です。詳しくはメールで下記まで。

教務課大学教育係：kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp



FDセミナー参加報告

京都高等教育研究センター「第1回FDセミナー」報告

工学研究院・技術職員 長谷川紀幸

京都高等教育センター「FDセミナー」

「京都高等教育センター」は京都市に設立された国公立大学によるコンソーシアムである(財)大学コンソーシアム京都に設置された大学教育・運営の改革と人材育成を研究する機関です。同センターでのFD研究の成果を加盟大学・短大等に還元することを目的に2007年度から「FDセミナー」を定期的で開催することとなり、7月14日に「第1回FDセミナー」が開催されましたので簡単に報告します。

組織的FD推進は人材育成が課題

今回のセミナーはFDの組織的推進のための人材養成の必要性という課題が取り上げられ「FDのリーダーになるために～FDの義務化からの新たな出発～」と題して行われました。この課題が取り上げられた背景には同センターが加盟大学・短大等へのFD実施状況のアンケートを行ったところ

- (1) FDが教員の個人的努力となっているためになかなか広がらない
- (2) FDを実施したいが人材的組織的な環境がないため何に何をどうすればよいかわからない

という意見が多かったことによるものです。この課題(1)に対応して、個々の教員による個人負担型F



Dから個々の教員のFDをサポートする組織的FDが実施できるために、センターではFDリーダー養成の研究会を発足させ、その成果として第1回FDセミナー開催へとつながったということでありませ

また(2)の課題に対してはFDのためのネットワークづくりと具体的な取り組みが今回のセミナーで紹介されました。

FD専門職としてのファカルティディベロッパー

セミナーでは2件の講演があり、最初に愛媛大学教育・学生支援機構 佐藤浩章准教授より「ファカルティディベロッパーという仕事」の講演が行われました。ファカルティディベロッパー(以下FDer)はFDを専門とする専任のFD担当者であり、米国ではすでにPOD (Professional and Organizational Development Network in Higher Education) という専門職の組織が作られるほどになっております。

愛媛大学はFD/SD(職員向け能力開発)/TAD(TA学生向け能力開発)三位一体型の能力開発による教育の質の向上を目指す取り組みとして実績を上げており、特色GPにも採択されております。昨年、本学事務局主催による職員向けSDセミナーでは愛媛大学においてSD推進の中心となった職員が来校し講演が行われましたが、組織的な能力開発の取り組みにより成果を上げている非常によい実践例が紹介されておりました。

愛媛大では個々の教員に対するFDスキルの開発を以下の5段階に分けております

- レベルI: 導入
- レベルII: 基本習得
- レベルIII: 応用・発展
- レベルIV: 創作・発展
- レベルV: 支援・指導

5段階に分けることで持続的な能力開発が可能なシステムを取り入れ、最終レベルでは「習得する立場から指導する立場へ」と発展することによりFDが拡大再生産されることを目指し、すでに6~7名の支援・指導者を育成できているということです。

ポジティブFD

愛媛大学の組織的FD体制では「授業コンサルティング」に特徴がみられ、米国ワシントン大学の教授開発センターで最も教員からのニーズが高いサービスであるMSF (Midterm Student Feedback :

中間期の振り返り)という手法を取り入れております。MSFは授業の中間期においてFDerが授業に入り受講学生に直接、授業についてのグループワークを行います。グループワークでは担当教員に教室から外してもらい、その上で学生に対して2色の付箋を渡します。1色には「その授業のよかったところ」を気がついたことをできるだけ多く書いてもらいます。学生には「教員への贈るメッセージ」として書いてもらいます。もう1色には「改善の提案」を「教員への授業をこうして欲しい」ということを書いてもらいます。こうしたグループワークでは「不条理な意見や感情的な意見が少なくなる」ということでした。その後、グループごとにお互いの意見を交換し合います。学生はグループ内での意見交換で自分の意見と他人の意見とを比較して新しい発見があるばかりでなく、他者に不条理な意見を見せることにより自ら反省点に気づくなどして、ポジティブな方向へと思考が切り替わるとのことでした。最終的に全員の意見を模造紙などに張り出すことにより学生たちにはさらに広い意見の交換となります。

授業評価アンケートなどでの意見は学生からネガティブな要素を抽出することもあり、そうした意見が教員にとってもネガティブに捕らえ返されることが多かったことに対して、MSFで集まった意見では前向きなものが多いため担当教員にとっても励みにもなるとのことでした。

グループワークで集まった「要望」もネガティブな要素が減少されているので、教員も受け入れやすくなると同時に、担当教員が後半の授業で「受け入れる/入れない」とコメントを出すことにより、学生たちは意見が教員に届いていると感じるということでした。

このMSFは当該授業期間中に受講学生へのフィードバックが可能であると同時に教員に対しても学生からの励みによって自然とFDへと意識が向いていく効果があるとのことでした。

このコンサルティング手法にはかなりの手間と時間がかかりますが、しかし、効果は大きかったということです。

FDの分類と課題

2件目の講演は京都高等教育センター FD研究会主査 同志社大学 圓月勝弘教授から「<FDQA>とFDネットワーク」題して講演されました。日本におけるFDの分類として

- (1) 研修型FD



(2) 授業改善型FD

(3) 祝祭イベント型FD

の3つの流れがあり、(1)では本学での本年度のFD合宿研修会の会場でもある大学セミナーハウス(現在施設名を八王子セミナーハウスと改称)による1990年の第1回FDプログラムから始まった多人数による研修型のFDです。特に合宿形式のFD研修は山形大学、愛媛大学などで非常に高い成果を上げております。

(2)は私立大学連盟による授業改善ワークショップなどに代表されるFDであり、(3)は大学コンソーシアム京都に代表される「多くの参加者を集める」イベント型のFDということでした。FDの歴史的段階としては

(1) ~1998 FD導入期(実施は任意)

(2) 1999~2005 FD普及期(努力義務)

(3) 2006~ FD充実期(FDの義務化)

となっており、(1)導入期は有志によるボトムアップ的なFD活動が中心であり、(2)の普及期においては各大学でそれぞれセンター設置など執行部によるトップダウン的なFD活動の実施が多かったということです。今後(3)としてFDの義務化とともに充実期に入ることが予想され、ボトムアップかトップダウンかという片方向ではなく両方向からのFDの実施体制によってFDを進めることが必要になってくるであろうとのことでした。

また、FD義務化による義務的なFDから出発しつつFDの充実によって自発性と恒常性が生まれてくる必要があるとのことです。

FDのネットワークと<FDQA>

すでに大学院ではFDが義務化され、今後学部教育にもFDが義務化される時代であります。しかし、FDを組織的に実施し、進めていくための人材が少ないことと同時に、FDに関する情報と実践例の蓄積が少ないために、各大学でFDの実績、成果を出すために非常に多くの苦労があることが、最初にあげた大学FDアンケートの調査結果からみてとられます。そのため、センターでは各大学でFDを実施し推進するためのFD担当者のネットワーク作りを進めることを計画しているとのことです。

その手始めとして大学コンソーシアム京都のwebサイト内にFD研究会Q&Aシステム(通称FDQA)がこのセミナー当日から開設されました。

このFDQAでは

(1) FD情報・ノウハウの共有化

(2) FD情報・ノウハウの収集と分析

(3) FDリーダーの日常的なネットワーク構築を目的として多くの方に利用していただきたいとのことでした。

FDQA (<http://www.consortium.or.jp/fdqa/>)

最後に

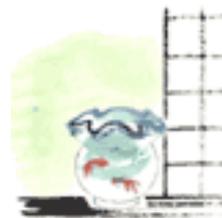
以上、ファカルティではない技術職員の立場ではありますが、大学職員としての自己研鑽の一環として今回のセミナーには個人的に参加してまいりました。FDを実践し成果を収めている大学の好例に触れることによって、本学におけるFDに対しても大変参考になる要素が多いと思い、報告させていただきました。

つたない文章により、せっかく聞いてきた参考になると思われる多くのことをお伝えできたかどうかは不安ではありますが、多くの先生方、職員、そして学生の方に参考になりましたら幸いです。

また、紙面の関係上、多くの資料を含めることができませんでしたので、当日の資料等をご希望の方はご連絡をいただきますようお願いいたします。

工学部 電子情報工学科

電子計算機室 長谷川(内線:4158)



寄贈図書のお知らせ

本学宛に以下のFD関連書籍が寄贈されました。中央図書館に配架しますので、関心のある方は中央図書館でご覧下さい。

- ・『魅力ある授業のために-教養教育賞受賞者による教育実践集-』大阪大学大学教育実践センター編(大阪大学出版会)
- ・『授業の工具箱』バーバラ・グロス・デイビス著、香取草之助監訳、光澤舜明・安岡高志・吉川政夫訳(東海大学出版会)



予 告

FD合宿研修会

テーマ：「大学における良い授業とは？」

大学教育総合センターFD推進部では、このたびFD合宿研修会を企画しました。主な対象は、大学の教壇に立って数年の若手の教員としていますが、本学の教職員であれば、どなたでもご参加いただけます。夏休み中のひと時、ご自分の授業について見つめ直してみるとともに、本学の教職員の仲間たちと横浜国大における良い授業のあり方について語り合ってみませんか？学内外より、FD事情に詳しい講師の先生をお招きしております。奮ってご参加ください。

日 時：平成19年8月29日11:30集合～30日15:00解散

場 所：八王子セミナーハウス（八王子市下柚木1978-1）

参加費：FD推進部で負担（宿泊費、交通費、食費を含む）、懇親会費2,000円

申込先：学務部教務課大学教育係 kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp（内線3107）上記メールアドレスへ、所属、氏名、連絡先明記の上、件名「FD合宿研修会参加希望」としてお申し込みください。

締 切：平成19年7月25日（水）〔先着20名程度、部局の参加者のバランスをみて決めさせていただく場合があります〕

研修会の内容

プログラムⅠ「なぜFDが必要なのか？」安岡高志（東海大）

プログラムⅡ「学生を育てる授業アクティブ・ラーニングの多様性」溝上慎一（京大）

プログラムⅢ「修己治人の意識を育むIDEAL授業」小田原修（東工大）

プログラムⅣ「米国における教育経験から見た良い授業とは」石原修（横浜国大）

プログラムⅤ「次世代型大学の良い授業 ナレッジ・マネジメントと参画教育の視点から」林義樹（日本教育大学院大学）

プログラムⅥ 参加者による自由討論「私が見つけた良い授業のヒント」



横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

この度、FD推進部では初めての試みとして若手教員を対象とした合宿研修会を企画しました。申込の締切期日は過ぎていますが、関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、教務課大学教育係までお問い合わせください。

次号のニュースレターでは、この合宿の様子についても報告する予定でおりますので、ご期待ください。



FD推進部より

編集後記

飯田学長、杉村FD推進部門長、各部局からのご寄稿等、皆様のご協力により横浜国大初のFDニュースレターの発刊にこぎつけることができました。

ここに至るまで、ニュースレター発行の提案からデザイン、編集まで、杉村FD推進部門長の多大なご尽力がありましたことに深く感謝いたします。また、各部局のFD推進部門委員、WG委員の皆様のお力で部局からの通信内容も充実させることができました。

かく言う私はWG主査という重責を仰せつかりながら右往左往するばかりでしたが、皆様のFD活動に対する関心の強さと深い内容のご意見に、身の引き締まる思いをしております。

今後、このニュースレターを単なる活動報告の場ではなく、新しいFD活動を提言し合い、議論を深める手段として、全教員に利用していただけるよう努力して参りたいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

FDニュースレターWG（工学部兼務教員）

君嶋義英

行事日程

7月9-23日 「学生による授業評価」アンケート前期分実施

8月29-30日 FD合宿研修会（八王子セミナーハウス）

9月初旬 授業評価アンケート集計結果配布

9月下旬 授業改善計画書提出

今後の予定されているFD推進部の活動

- ・授業公開
- ・FDシンポジウム
- ・「学生による授業評価」アンケート後期分



本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

FD at YNU ニュースレター No.1

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキング・グループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp

発行／平成19年7月 発行